

広島大学大学院放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム 第4回グローバルフィールドビジットを実施しました

フェニックスリーダー育成プログラム第4回グローバルフィールドビジットとして、学生3名が、ベラルーシ南部のホメリ州にある the Research Institute of Radiology (RIR) の本部で行われたトレーニングコースに参加しました。

このコースは“Late phase nuclear accident preparedness and management” と題して行われ、フランスの放射線防護評価センター (Nuclear Protection Evaluation Center ; CEPN) と RIR の運営により行われました。このトレーニングコースに平成27年9月22日(火)～24日(木)の日程で参加しました。出席者は本学学生を含めて17名であり、日本からは福島県南相馬市、相馬市の病院で勤務する医師2名が参加していました。

講義では主に欧州における原子力災害後の対応の原則や、汚染された食物や水の管理および内部被ばくの予防の実践について学びました。また、日本の講演者からは福島第一原子力発電所事故の後の被災者の内部被ばく健診についての実際に加えて、被災者の避難によって生じた健康影響や、孤独死などの問題が報告されました。

また、1986年のチェルノブイリ原子力発電所事故の後、放射線量が高く住民が移住を余儀なくされた地区の見学を行いました。そこでは、事故から29年が経過した現在でも、医療機関や教育機関で住民の内部被ばくを防ぐための検査や教育が行われている現状を知り、原子力災害の影響が長期化することを学びました。

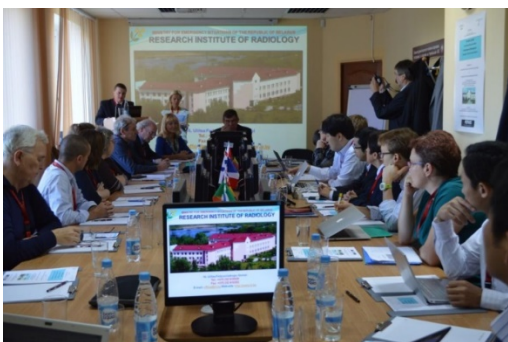
福島第一原子力発電所事故と同様に、影響が国際原子力評価事象尺度で最も深刻な「レベル7」に相当するチェルノブイリ原子力発電所事故の事例から、原子力災害後の対応についてより見識を深める機会となりました。

放射能社会復興コース 森山信彰

Research Institute of Radiology:

http://rir.by/index.php?action_skin_change=yes&skin_name=city-skyline_eng

トレーニングコースが行われた会場



トレーニングコースの参加者と主催者



チェルノブイリ原子力発電所事故の後、移住を余儀なくされた地域では未だ廃屋が形をとどめていた



ホメリ州南部にある、チェルノブイリ原子力発電所事故による被害の状況を後世に遺すための保護区の入入口。今も通常よりも空間線量が高い状態となっている。

